愛知教育大学研究報告，48（人文・社会科学編），pp. 182～176, March, 1999

中国近代における人力車夫文学について（中）

高橋　みつる
（アジア文化選修）

一

筆者は、前稿「中国近代における人力車夫文学について（上）[1]」において、五四時期以来、人力車夫が多くの文学作品に描かれてきた歴史的・社会的状況と、文学史的背景について考察した。そして、人力車夫を主要な登場人物とする十八篇の対象作品の内、小説三篇を中心として、作品分析を試みた。その結果、まだ初歩的ではあるが、次のような人力車夫文学の特徴を確認することができた。プチブル知識人の視点から、「私」という第一人称で、人力車夫との関わりを描いた作品が多いこと。乗客である「私」は、車夫に対する加害者意識にも苛まれていること。車夫に同情するあまり、「私」は多めの車賃を与える、という行為に及んでいること。作品に登場する車夫が、体力のない少年か老人であること。以上の特徴は、いずれも、苛酷な労働と悲惨な生活に苦しむ人力車夫への同情が、作品の基本主題であることを表している。

本稿で取り上げる戯曲「車夫的婚姻」は、対象作品中、指摘したような特徴を一つも有していない唯一の作品である。以下本稿では、人力車夫文学の中で、「車夫的婚姻」がどのように特異であるのか、また、その特異性の所以と背景について、考察していきたい。なお、上演を前提とした脚本ではあるが、せりふや舞台設定など、演劇的要素に関しては、考察の対象としない。

二

作品の分析に入る前に、作者とテキストについて、簡単に記しておく。陸家継作「車夫的婚姻」は、一九二二年二月二六日から三月二日の五日間にわたって、『晨報副鐫』に掲載された、全五幕の戯曲である。

作者の陸家継については、管見の範囲では、人名辞典や文学・演劇関連の文献には記載されておらず、現在のところ、その三年前に「悪少年」と題する戯曲を発表した、ということが判明しているのみである。ただし、「車夫的婚姻」の版権及び上演権[2]が、新中華戯劇協社[3]にあり、同社の中心人物である陳大悲が、この作品の紹介記事を書いている[4]ことから推測すると、陸家継は、同社のメンバーであるか、少なくとも、関係者或いは共鳴者であることは確かであろう。陳大悲の言によれば、「悪少年」によって、北京の演劇愛好家の大半に知られる存在ではあったらしい。なお、民衆戯劇社によって、一九二一年五月三一日に上海で創刊された月刊誌『戯劇』の編集を、一九二二年一月の第二巻第一号より新中華戯劇協社が引き継いで、四月三十日の第四号まで出版しているが、同誌の執筆者陣に陸家継の名は見当たらない。

さて、「車夫的婚姻」は、もともと中国大学新劇団のために書かれた戯曲である。同校の共楽会が、一九二二年三月十一日、十二日の二日間、第一舞台で演芸会を催し、その一日めに「悪少年」が、二日めに「車夫的婚姻」が演じられたようである。『晨報副鐫』の掲載は、新中華戯劇協社が、中国大学新劇団の舞台公演に先駆けて発表したものである。

はじめに、行文の便宜上、物語の概略を述べておく。

この作品の主な登場人物は、二十二歳の人力車夫楊志新、僑業銀行頭取である李華南、李華南の娘で二十歳位の李笑凌、彼女に思いを寄せる二十二歳の呉約克の四人である。

深夜、李笑凌が、乗っていた人力車の車夫から金目的に襲われて助けを求めた時、叫び声を聞きつけた車夫の楊志新が駆けつけて、彼女を危機から救う。しかし、楊志新は、その時負傷して、入院してしまう。それがきっかけで、二人は親しくなり、また、李笑凌の父親李華南も、楊志新の人物を信頼して、かれを自分の銀行の会計係とする。ところが、李華南の親友の息子で、李笑凌と旧知の間柄である呉約克は、彼女の気持ちが次第に車夫出身の楊志新に移っていくことに、

嫉妬と焦燥を感じ始める。ある日、とうとう思いあまって、笑凌に求婚するが、曖昧な返事しか返ってこない。その二日後、楊志新と李笑凌が結婚の話を交わしているのを耳にした呉約克は、思わず二人をなじり激論となる。そこへやって来た李華南を交えて、元車夫と結婚することをめぐり意見を戦わせるが、李華南は、楊志新と娘の結婚を認めてしまう。自暴自棄となった呉約克は、拳銃を取り出して、楊志新に向け、さらに自殺しようとするが、説得されて思いとどまり、一介の車夫にさえ負けた屈辱感に打ちのめされて、閉幕となる。

以上のストーリーからもわかるように、人力車夫文学におけるこの作品の最大の特徴は、元車夫の青年が金持ちの令嬢と結ばれる、というハッピーエンド（大団円）の芝居である点にある。そして、ハッピーエンドを導くために、人物設定には様々な仕掛けがほどこされており、その人物像にも、他の作品に見られない特異性を見いだすことができる。

三

まず、主人公楊志新が、どのような人物として描かれているかを見ていこう。

既に述べた通り、楊志新は、二十二歳の青年である。二十二歳といえば、体力的に最も充実した年齢であり、少年車夫や老人車夫には命を縮めるほどつらく厳しい肉体労働も、頑健な若者車夫なら彼らほどの肉体的ダメージは受けないであろう。また、スピードを出すことのできる体力のある車夫は、その分だけ車賃も高いため稼ぎも多く、経済的にも比較すれば楽なはずである。さらに、楊志新には、養わなければならない家族や係累がいないことも、幸いしている。多くの車夫が、家族のためにその身を粉にして働かざるをえない状況に置かれている中で、彼は両親もなく妻子もいない。孤独ではあるが、その代わりに、ただ自分のためにだけ生きていけばよい、という身軽で自由な境遇にあるわけである。

そのような条件に恵まれているからこそ可能な生き方ではあるが、彼は、他の大多数の車夫のように、ただ食べていくだけに汲々としているのではなく、常に人間としてより良く生きていきたい、という向上心を持ち続けている。自分を車夫風情だなどと卑下して、卑屈になることもない。

ところで、若くて、独身で、壮健な身体に恵まれた、前向きな車夫といえば、老舎の代表作『駱駝祥子』の祥子が想起される。農村から出て来て、車夫として働き始めた頃の祥子は、元気で希望に満ちあふれていた。そして、彼の人一倍の労働意欲を支えていたのも、やはり、向上心であった。

しかし、同じように向上心を持つ人生に前向きな若者であっても、祥子と楊志新では、めざすところが違っている。賃借りの車夫である祥子は、自分の車を持って立派な車夫になり、将来は車宿の主人になることが、最高の夢であった。自分の車を持つ、という祥子の夢は、賃借料の重圧に苦しむ、現実の大多数の車夫たち共通の願いでもある。ところが、楊志新の関心は、そのような車夫としての生活次元にはない。彼は、車引きとして働きながら、なおかつ東城教会で開かれている平民学校で勉強している。車夫が勉強しているのを見て驚いている警官に向かって、彼はこう答えている。「お巡りさん、あなたは我々車引きをあまりにもばかにしていませんか。まさか、我々車引きは人間ではないとでも言うのですか？人が勉強するのが不思議なことですか？」（第一幕）つまり、楊志新の向上心は、向学心と呼びかえてもよいもので、その向学心は、車夫も一人の人間であり、人間である以上学んで自分を高めたい、という一種の人生哲学に発している。祥子の向上心が、あくまで車夫という限られた枠の中での理想の実現をめざすものであるのに対して、楊志新の場合は、車夫という枠を超えたより高次元の欲求に基づくものである、といえよう。もちろん、楊志新の向学心を支える前提として、彼が、自分の車を所有している自前の車夫である、と言う設定が、大きな意味を持っている。つまり、彼は、最初から、車夫の貧困の最大の原因である賃借料という搾取から自由な身であったわけである。

当時の車夫の実態を考えたとき、祥子に体現された車夫像は、ある種の典型であり、普遍性を有しているが、車夫楊志新の人物像は、余りにも現実性に乏しく、理想化され過ぎているように感じられる。実は、それは、楊志新は生来の労働者階級出身ではなかったことによるのである。

彼が病室で李華南に語ったところによると、彼には裕福な兄夫婦がいて、もともと彼は車夫をしなければならないような貧しい家庭に育ったわけではなかった。三歳で母を亡くし、八歳のときに父が亡くなった後、その遺産を兄夫婦に独占されて、勉学の支援さえ拒否されたばかりか、楊家の人間ではないとまで言われて、つらい毎日を送っていた。そのような家族の軋轢から逃れて、人間らしく生きるために、一昨年、家を出て車夫になり、自活しながら勉強を続けているのである。兄夫婦が惨い扱いをするのにはわけがあり、楊志新の母親が正妻ではなく、子供を身ごもってから父に身請けされて楊家に入り、その七か月後に生まれたのが志新だったのである。楊志新の生まれた家がどのような家柄かはわからないが、妾を持つことができ、相続すべき財産があった、ということから推測すると、最低でも店を一軒構えた商家位の経済力は持っていた、と思われる。もし、父親の死や、兄夫婦による遺産の独占といった不幸に見舞われることがなければ、

庶子であるとは言え、労働者に身を落とすようなことはなかったであろう。

楊志新は、生まれながらの下層階級の人間ではなかった、と明かされれば、彼の車夫を超越した考え方や行動も、ある程度説明がつく。彼にとって、車夫であることは、（もちろん、他のどんな職業であろうと）恥ずべきことであるどころか、自分の力で生きているという誇りにさえなっていたのである。

四

楊志新が、今は訳あって車夫の身であっても、元は裕福な家の生まれで、逆境にもめげず向上心を持ち続けている、立派な若者である、という設定は、銀行頭取の娘李笑凌との身分違いの恋愛と結婚を成就させるために考えられたものであろう。楊志新が、典型的な根っからの貧しい車夫であったのでは、令嬢との結婚にあまりにも現実味がなく、観客の共感を呼び得ないであろう。そこで、結局、車夫ではあるが、もとを正せば良家の出、という折衷案を取らざるを得なかったのではないかと考えられる。事実、当時、失業者の受け皿のような役割も果たしていた車夫の世界には、零落して車夫に身を落とす前は、それなりの暮らしをしていた者も珍しくはなかったのである。

二人の結婚を成就させるために、もう一人特殊な人物として設定されているのが、李笑凌の父親の李華南である。

李華南は、一昨年妻に先立たれて、父娘二人きりの寂しい生活を送っている。そんな彼のただ一つの願いは、笑凌が自分の眼で意中の人を選び、将来幸せな結婚をすることである。心中密かに、親友の息子であり、笑凌とも親しい間柄にある呉約克との結婚を望んでいるが、彼は、決して笑凌に自分の希望を話そうとはしない。なぜなら、母親が死んでから、一度も父に背いたことのない笑凌は、きっと自分の言葉に従うであろうと確信しているからである。結婚に際して自分の考えを押し付けることは、彼の望むところではなかった。自分の意志で結婚相手を決めさせたい、という彼の決意は、それほどまでに堅固なものだったのである。

ところで、この作品が執筆された当時、結婚は「家」や「親」の命令に従うもの、という古い婚姻観がまだ大勢を占めている時代であった。ほぼ同時期に発表された『海上大観園』を元に、当時の婚姻観について考察した松田郁子氏は、「青年男女の間では、伝統婚を否定し〝自由結婚〟を求める声が高まっていた。しかしそれは伝統的倫理観に基づく社会通念から依然として排除されていた」そして「20年代になっても〝恋愛の自由〟も〝自由結婚〟もまだ実現は難しかったと考えられる[5]」と述べている。

また、そのような時代状況を反映して、五四時期以来、恋愛の自由や「自由結婚」を唱える多くの小説が創作されるが、「「家」の重圧との闘いのなかで自由な恋愛を成し遂げ、あるいは逆に恋が無惨にも押しつぶされてしまうというのが当時の恋愛小説のほぼ共通したストーリーであった[6]。」要するに、愛情に基づく自由な結婚を阻害する最大の障害は、親が決めた結婚を強制する家父長制度にあったのである。

このような状況に照らしてみると、娘に結婚の自由を保障するため、自分の希望さえも胸の中にしまっておく、という李華南の態度は、物わかりの良すぎる、ほとんど現実離れした理想の父親像であると言えよう。男女の恋愛と結婚を描いた文学作品において、自由な恋愛、自由な結婚を勝ち取るための「家（長）」との葛藤が、最も重要なテーマであるとすれば、「車夫的婚姻」は、その関門を何の苦労もなく一足飛びに飛び越えてしまい、さらに困難な問題、つまり、身分を越えた恋愛が、主要テーマとなっているのである。

ただし、その場合にも、進歩思想の持ち主である李華南は、娘の好きな相手が車夫であるという、社会常識からすれば異例の事態にも、冷静かつ寛容な態度を示している。ここにも、父命が絶対的であった当時の古い婚姻観は影を落としていない。家長に認められた公明正大な結婚の成就、という点で、他の恋愛小説群とも根本的に異なっているのである。

「車夫的婚姻」が発表されてから約五年後、作品と類似の事件が現実に起こった。金持ちの令嬢とお抱え車夫との恋愛事件である。ちょうどその頃、上海に滞在していた金子光晴は、中国の車夫について述べたくだりで、この事件にも言及している。「抱え車夫が、金持の令嬢と恋愛をして、尊卑にしばられた世間常識の型を破った事件が、上海中の人気と賞讃をよんで、毎日の新聞のトップ記事となっていた。令嬢の名は、黄慧女、抱え車夫の名は、陸根栄。…中略…　当分のあいだ、人々は、黄陸一対のその後の消息で明けくれていたばかりか、大衆娯楽場の「大世界」では、芝居に仕組まれて人気を呼び、映画になって、さらにはてばてまでひろめられた。車夫の地位が、それほどのおどろきを呼ぶほど、人外な、みじめなものだったことを物語ることにもなる[7]。」

金子は、令嬢の名を黄慧女としているが、正しくは黄慧如のようである。それはともかく、彼の述べる如く、一九二八年一一月、一二月頃の『申報』を見ると、二人の事件と関連する記事[8]や、「黄慧如與陸根栄」・「黄慧如産子」という演目の芝居の広告が連日のように掲載されている。また『上海漫画』でも、一再ならずこ

の話題が採りあげられている。[9] いずれも、事件の全容を伝えるような性格の資料ではないため、詳細は不明であるが、およそ次のような経緯ではないかと推測される。

裕福な家庭に生まれた黄慧如は、教養のある令嬢に成長する。やがて、陸根栄と出会い、愛し合うようになった二人は、手に手を取って駆け落ちするが、陸根栄が告訴され投獄されてしまう。残された黄慧如は、すでにお腹に陸の子どもを宿しており、田舎で密かに出産する決意をする。

二人は、なぜ駆け落ちしなければならなかったのか。また、陸根栄は、何の罪で投獄されたのか。おそらく、黄慧如には親の決めた婚約者がいたか、あるいは、身分の違う結婚を親が認めなかったためであろう。陸を訴えたのも、陸との結婚を承認しない黄の親ではなかったかと思われる。陸の裁判沙汰で事件が表沙汰になり、自由恋愛を地で行く二人の勇敢な行動が、マスコミで競って報道されるようになったのであろう。

ところで、陸根栄の身分について、上記の関連記事のどこにも、お抱え車夫であると明記したものはない。浅予の漫画に描かれた陸根栄は、長袍を着ており、一見知識人のようにさえ見える。金子の「令嬢とお抱え車夫の恋愛」説を裏付ける証拠は、今のところ見つからないが、少なくとも、黄慧如は富裕階層で、陸根栄は彼女と釣り合わない低い階層であることは、間違いあるまい。身分違いの恋愛は、世間の耳目を集めはしたが、投獄・別離という残酷な結果をもたらしている。

五年の時を経て、なお社会はこのように厳しいものであったことを考えると、「車夫的婚姻」創作時における作品世界が、いかに現実と遠く隔たった虚構の世界であったかが、再確認できる。

五

ここまで、「車夫的婚姻」が、元車夫と銀行頭取の娘という身分違いの「自由結婚」を主題に書かれたものであること、そのために主人公の車夫に特殊な人物設定が施され、それが他の人力車夫文学に見られない特異性となっていること、さらに、恋愛小説としても特異な要素を持つものである、ということを見てきた。

ところで、この作品の主要な登場人物の中で、李笑凌の結婚をめぐり、ただ一人敵役として描かれているのが、呉約克である。次に、この呉約克の言動について、もう少し詳しく見ていきたい。

李笑凌に思いをうち明けて、快い回答をもらえなかった呉約克は、李華南と二人きりになった機会を利用して、「彼（楊志新・筆者。以下同じ）は所詮車夫上がりだから、腹に一物あるに違いないと思いますよ。伯父さん、あなたは、どうして笑凌に少し用心するように言わないのですか！」（第四幕）と、楊志新のことを讒言する。

また、終幕、四人が激論する中で、笑凌に向かって、「楊志新が一体何様だって言うんだい？　たかが車引きの分際じゃないか？　車夫と結婚して何の得があるんだ？」（第五幕）と、ついに楊志新に対して抱いている彼の本音が現れる。

さらに、呉約克と娘の感情がうち解け合うことを望んではいるが、結婚は、あくまでも本人の意思を尊重すると言う李華南に対して、「あなたの希望を、できるだけ笑凌にお話しされたらいいんですよ。笑凌は日頃からあなたの言うことをよく聞くのですから。あなたが言えば、彼女はあなたの意志に背くようなことはしないでしょう。」（第四幕）と、働きかける。

これらの言葉は、李笑凌との結婚問題において、自分が不利になったあせりから発せられたものではあるが、図らずも、彼の思想の保守性の一端を露呈する結果となっている。一つは、車夫だから善人であるはずがない、車夫はそれだけで下賤な人間である、という職業・階層による先入観に基づく差別意識である。もう一つは、結婚に際して、子どもは父親（家長）の命令に背くべきではない、という古い婚姻観である。しかし、この考え方は、既に述べたように、当時むしろ社会の大勢を占めていたものであり、一見悪人のように見えるが、呉約克の言動にこそ、世間の常識が反映されていると言えよう。楊志新に「気骨のある人間が、何をより好んで車引きなんかになるかね？」（第一幕）と問いかけた警官もまた、呉約克同様、世間の常識を代表する一人である。

では、呉約克のような考え方に対して、楊志新本人、そして彼を支持する李華南、李笑凌の言動からは、どのような車夫観・婚姻観が窺われるであろうか。

まず、車夫を下賤な人間であるとする社会通念に対して、楊志新は、第三章でも触れた通り、車夫も一人の人間である、という確固とした信念を持っている。彼が、最後の激論の場面で、「ぼくは車夫出身だが、心は清廉潔白だ！　君（呉約克）はどうして車夫だからいいとか車夫だから悪いということで、ぼくを誹謗するんだい？」（第五幕）と言っているのも、車夫である前に一人の人間である、という信念に基づいている。

李華南もまた、同様の考えの持ち主である。次の言葉が、そのことを表している。「君（楊志新）は車夫だが、一人の人間でもある。わたしは銀行の頭取だが、

やはり一人の人間に過ぎない。わたしたちは同じ人間であって、どこに身分の違いなどあろうか」（第二幕）「彼（楊志新）は車夫出身で、君（呉約克）は車夫出身ではないが、一体君と彼とにどんな違いがあるかね？」（第五幕）李華南のこのような開明的な考え方の背景には、彼が、若い頃外国で肉体労働に従事していたことがある、という過去の経歴が影響を与えている。そのつらい経験が、貧しい労働者に対する理解と思いやりを生んでいるのであろう。

そして、李笑凌も、「車夫だって人間よ。まさか車夫でないあなた呉約克に嫁がなければ、幸せにはなれない、とでも言うの？」（第五幕）と、車夫という職業で、人間の優劣や価値を計ることを否定している。もっとも、李笑凌が、職業による偏見に縛られているような、旧式の女性であったならば、楊志新と親しく交わり、彼に対して特別な感情を抱くようなこともなかったであろうが。李笑凌の人となりの善良さは、この他に、自分の個人的な用件のために、父親の自家用車を利用したりはしないという、潔癖なところにも表れている。そうして、父親の李華南も、彼女の奢らない謙虚な生活ぶりを肯定している。

このような彼らに共通する車夫観の根底には、人間は平等の権利を持つものである、という認識があり、そこに、五四新文化運動以来、社会改革を目指して提唱されてきた、「個性の独立」や「自我の確立」などの新しい思想が込められていると考えられる。

ただし、楊志新と李華南の間には、細かく見ると、微妙な違いも認められる。入院中の楊志新を見舞った李華南が、回復したらまともな仕事を探して、もう少し楽な生活をするように、と勧めたのに対して、「ぼくは、車引きもちゃんとした仕事だと思っています。自分の力で食べていくことができさえすれば、身分がないも何も関係ありません」（第三幕）と答えている。労働者としての自覚と誇りに裏打ちされた言葉であるが、ここには、労働者階級が社会革命を発展させる重要な担い手として成長を遂げつつあった、当時の社会状況が反映されているものと思われる。拙稿（上）で既に述べたように、そもそも、人力車夫が文学作品の題材に採りあげられるようになった時代背景の一つに、当時の「労工神聖」の提唱に象徴される労働者尊重の風潮があったわけであるから、主題は異なっていても、車夫を主人公とするこの作品の中に、そのような主張が盛り込まれていることは、不思議なことではない。

この時代の思想背景を物語るものとして、その他に、楊志新が働きながら通っていた平民学校が挙げられる。平民学校とは、一九一九年に中国を訪れたデューイの影響を受けて起こった、平民教育運動の一環として、全国各地の進歩的青年知識人によって主催された、正式学校に入学できない一般大衆のための学校である。たとえば、当時北京で最も影響力のあったものに、北京大学学生の鄧中夏等が組織指導する北京大学平民教育講演団があり、一九一九年から一九二三年まで活動を続けた。また、一九二〇年には各地に共産主義小組や社会主義青年団が次々と成立し、彼らが労働補習学校を組織指導した。[10] 楊志新が通う学校が、教会で開かれていることから考えると、おそらくキリスト教系の人々によって運営されている平民学校という設定になっているものであろう。

次に、婚姻観について見ていくが、李華南の考えや態度は、既に第四章で一通り述べているので、ここでは、結婚問題の当事者である楊志新・李笑凌について、確認しておきたい。

作品の中では、二人が次第に親密になっていく恋愛の過程は、具体的場面としては、ほとんど描かれていない。ただ、人生の様々な問題について心を開いて話し合うような、許し合った仲になっていたことは、彼らの会話から想像できる。初めて李笑凌が楊志新に特別な気持ちを伝えたのは、第五幕、呉約克から求婚されたことを彼にうち明けた時である。楊志新は、彼女の意思表示に対して、当初、消極的な態度を示す。なぜなら、彼自身は、人力車夫という出自を恥じてはいないが、元車夫と令嬢の結婚という異例の事態が引き起こすであろう波紋、人々の非難が、やはり、彼を躊躇させたのである。その時、李笑凌がこう言って、楊志新を説得する。

「あなたは間違ってるわ。わたしたちはいつも、世の中の愛欲だけの結婚[11]も政略結婚[12]もよくない、と話していたでしょう。それなら、わたしたちは当然まともな結婚[13]をするべきよ。あなたがもし、わたしたちの結婚はまともな結婚だと考えるのなら、人がとやかく言うことなど気にする必要はないでしょう？」

楊志新は、結婚のあり方に対する、彼女のこのような強い信念を看て取って、結婚の決意を固める。

ここに提示された、彼らが理想とするまともな結婚とは、世に行われている愛欲だけの結婚や政略結婚と対比されるもの、つまり、自立した男女の愛情に基づいた結婚、という意味であろう。それは、前章で言及した「自由結婚」の意味内容とほぼ重なるものであると考えられる。結局、「自由結婚」の理念に従えば、たとえ相手が車夫であろうと、身分の違いなど、克服できない問題ではないのである。

なお、この作品は、陳大悲の紹介文の中で、「喜劇」と銘うたれている。『漢語大詞典』によれば、「喜劇」とは、「誇張という手法で、醜悪な、あるいはたち遅れた現象を風刺・嘲笑し、それらの現象それ自体の矛盾や正常な事物との衝突を際立たせるもので、せりふはユーモラスで、しばしば人を笑いに誘い、結末は大抵ハッピーエンドである」[14]と説明されている。この定義を踏まえて言えば、「車夫的婚姻」において風刺し嘲笑されているのは、古い観念から脱却できないが故に、醜態をさらして、恋人までも失ってしまう呉約克であることは間違いない。

六

以上見てきたように、「車夫的婚姻」は、身分を越えた「自由結婚」を主題として、それに関連する婚姻制度や家父長制の問題、「労工神聖」、人間の平等など、当時の新潮流の思想が、ふんだんに取り込まれた作品である。そのために、主人公の車夫楊志新が、乗客を乗せて走る場面が全くないなど、人力車夫文学にほとんど例外なく描かれている、車夫としての労働や生活の苦しみは、直接的な形では表されていない。このような作品を人力車夫文学と見なしてよいかどうか、幾分疑問の残るところであるが、私は、やはり人力車夫文学の中の一作品として解することができる、と考える。なぜならば、ストーリーの最大の山場である銀行頭取の娘との結婚問題において、楊志新が人力車夫であった、という事実が、結局唯一の障害となっているからである。逆に言えば、楊志新という人物形象から車夫出身という設定を取り除いたとすれば、この話は成立しないことになるであろう。題名の由来も、そこに起因していると思われる。

むしろ、主題を異にすることによって、この作品は、他の人力車夫文学とは違った視点から、人力車夫の置かれた社会的立場や境遇を照射する結果となっているのである。

最後に、「車夫的婚姻」とやや似通った状況設定にある日本の文学作品、岩下俊作『富島松五郎伝』（劇化、映画化された「無法松の一生」の原作）[15]について、簡単に触れておきたい。

話はよく知られているが、けがをして泣いている吉岡大尉の息子敏雄を、偶然泣き声を聞きつけた車夫の松五郎が介抱し、背負って家まで送り届ける。そのことがきっかけとなり、松五郎は吉岡家に親しく出入りするようになり、大尉が病死したあとも、夫人良子への淡い恋心を押し殺しながら、影になり日向になって母子の面倒をみる。敏雄が成長した後のある日、酔っぱらった勢いで夫人の手を握ってしまった松五郎は、それ以来夫人の前から姿を消してしまい、ある晴れた日、昔敏雄が通っている時よく行った、懐かしい小学校の運動場で、静かに生涯を終える、というものである。

「車夫的婚姻」と共通しているのは、まず、夫人にとって松五郎は、最愛の息子を助けてくれた恩人として出現したことである。楊志新も、李笑凌の命の恩人として登場する。二人の出会いが、乗客と車夫という一種の主従関係ではなく、心情的には、逆の力関係で出発したことが、その後の密度の濃い交流へと進展する下地となっているのではなかろうか。

次に、良家の夫人と車夫との身分違いの恋である。もっとも、夫人が松五郎のことを好きであったかどうかは、従来議論のあるところであり[16]、恋とは言っても、松五郎の一方的な抑圧され変形された秘められた恋情に過ぎない。しかし、下層階級の車夫の身でありながら、将校の妻を好きになってしまった松五郎が、階級格差の前に懊悩する構図は、元車夫と令嬢の結婚にのしかかる社会の重圧にたじろいでいる楊志新と、重ね合わせることができよう。

ただし、「車夫的婚姻」は若い独身の男女、『富島松五郎伝』は良子が既婚者で松五郎も中年の独り者という、二人が出会ったときの年齢や、『富島松五郎伝』では、子どもの敏雄が二人を介在する存在となっているが、「車夫的婚姻」では、それに該当する存在はないことなど、当然違った要素もある。最も異なる点は、恋の成就と離別という結末のあり方であろう。これは、『富島松五郎伝』が、車宿の息子として育った作者が、自分の見聞をもとに現実世界に基づいて創作した作品であるのに対して、「車夫的婚姻」は、おそらく、階層を越えた「自由結婚」の理想の姿を、人々に啓蒙宣伝することを目的とした作品であることによると考えられる。

注

(1)　『愛知教育大学研究報告』第四五輯（人文・社会科学）（一九九六年三月、一七六～一六九頁）

(2)　台本の初めに付された説明には、「排演権」とある。「排演」は、ふつう劇団などが作品を通してリハーサルすることを言うようであるが、ここでは、実際に上演されているので、上演権としておく。

(3)　一九二二年一月、陳大悲・蒲伯英等によって結成されたアマチュア演劇団体。陳大悲の「新中華戯劇運動的大同盟」（『晨報副鐫』一九二二年二月一四日）によれば、同社の活動の目的は、「全国のアマチュアの演劇家や演劇グループ及びすべての演劇愛好家たちを結集して、共同で、近代的・教育的・芸術的演劇を提唱・研究し、新中華の国劇を創造する準備をしよう」

というものであった。

(4) 陳大悲「歓迎両創作的劇本！」（『晨報副鐫』一九二二年二月二四日）

(5) 松田郁子「羅伽陵と『海上大観園』に描かれた螺蛳―婚姻観の変化につれて」（『野草』第六二号、一九九八年八月、四六、四七頁）

なお、結婚の自由に関する呼称、及びその定義については、同論文三七～三八頁と注13に整理されている。本稿で使用する「自由結婚」も、同じく「〝男女の自由な選択による婚姻〟」を意味するものであり、自由な結婚、結婚の自由と同義とする。

(6) 張競『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店、一九九五年、一七八～一七九頁）

(7) 金子光晴『どくろ杯』（中央公論社、一九七一年）。ここでは、中公文庫、一九九一年（一三二～一三三頁）に拠る。

(8) 「陸根栄之倒影」一九二九年一一月二八日、第六張。

「黄慧如致陸根栄之情書」一九二八年一二月三日、第九張。

(9) 『上海漫画』・飛（署名、以下同じ）作（無題、一九二八年一二月一五日）、浅予作「黄慧如女士略傳」（一九二九年三月三〇日）、涵美作「黄慧如的死」（一九二九年三月三〇日）。ここでは、『上海漫画』上（上海書店出版社、一九九六年、影印本）に拠る。

(10) 華東師範大学教育系教科書編『中国現代教育史』（華東師範大学出版社、一九八三年、二七頁）、中山時子編『老舎事典』（大修館書店、一九八八年、四八四頁）、『中国大百科全書　教育』（中国大百科全書出版社、一九八五年、二七七頁）、参照。

(11) 原文は、「愛欲婚姻」。双方の同意によらない、主として男性の情欲のみに基づいた結婚のことであろうか。たとえば、『金瓶梅』における西門慶と潘金蓮の結びつきや、巴金『家』において、馮楽山老人が明鳳を見初めて妾に迎えようとした、などは、これに当たるのではないかと思われる。

(12) 原文は、「勢利婚姻」。

(13) 原文は、「正当婚姻」。

(14) 第三巻、四〇五頁。

(15) 一九三九年、『九州文学』一〇月号に発表。ここでは、中公文庫、一九九四年に拠る。

(16) 大月隆寛『無法松の影』（毎日新聞社、一九九五年）、参照。

（平成10年9月9日受理）